

# 交牧連の活動日誌

～みんな違う みんな仲間～

## 第22回 子どもの未来につながる酪農体験

# 子どもたちの心の支援を目的に 被災小学校で「もーもースクール」

地域交流牧場全国連絡会東北ブロック(青森県鯉ヶ沢町 ABITANIa ジャージーファーム) 安原 栄蔵

### 会員間にとどまっていた交流活動が 画期的な社会貢献活動に

私は1990年11月、青森県唯一のジャージー牧場としてABITANIaジャージーファームを設立しました。6頭からのスタートで、設立当初から小学校はもちろん、街中のスーパー、ホテルのエントランス、各種イベント会場など、機会があるたびに牛との触れ合いや、消費者交流を目的とした酪農体験を実施してきました。

地域交流牧場全国連絡会(以下、交牧連)は「つなぐ」「続ける」「育てる」をスローガンに、酪農家の交流活動を目的として酪農家によってつくられた全国組織です。会員として参加する中で、私も全国各地の会員の方々と交流でき、いろいろな酪農経営の形があることを知ることができました。それはとても心強いものでした。

今回は、交牧連が開催した被災地での「もーもースクール」について紹介します。

2011年は、それまでの活動を一変させる事業が理事会と代議員会で承認されました。

その年の3月11日に発生した東日本大震災。東北の太平洋沿岸600km以上にも及んだ被害は想像をはるかに超え、私もただただ呆然とするだけでした。日本中が被災者支援を考える中、交牧連でも理事会で被災地支援について協議しました。しかし被害の大きさに圧倒されるだけで、いつ、どこに、どのような支援がいいのかとまらない中、東北ブロックの理事から一つの提案が出されました。

それは被災地での酪農体験の実施でした。交牧連の会員は酪農教育ファームと連携し、普段から「生きる」や「命」を学ぶ場として酪農体験を捉えていることを思い出しました。震災で住む所をなくし、家族を亡くした悲しみや絶望に暮れながらも悲惨な状況乗り越えようと、頑張っている子どもたちの心の支援を目的に、牛との触れ合い体験を実施するその提案は、理事会と代議員会の

承認を受けて実現に向けて動き出すことになりました。それまで会員同士の交流活動にとどまっていた事業が被災地復興支援という社会貢献活動につながっていく画期的な決定でした。

### 被災地での初の開催に不安感じながらも 全員に楽しい体験を

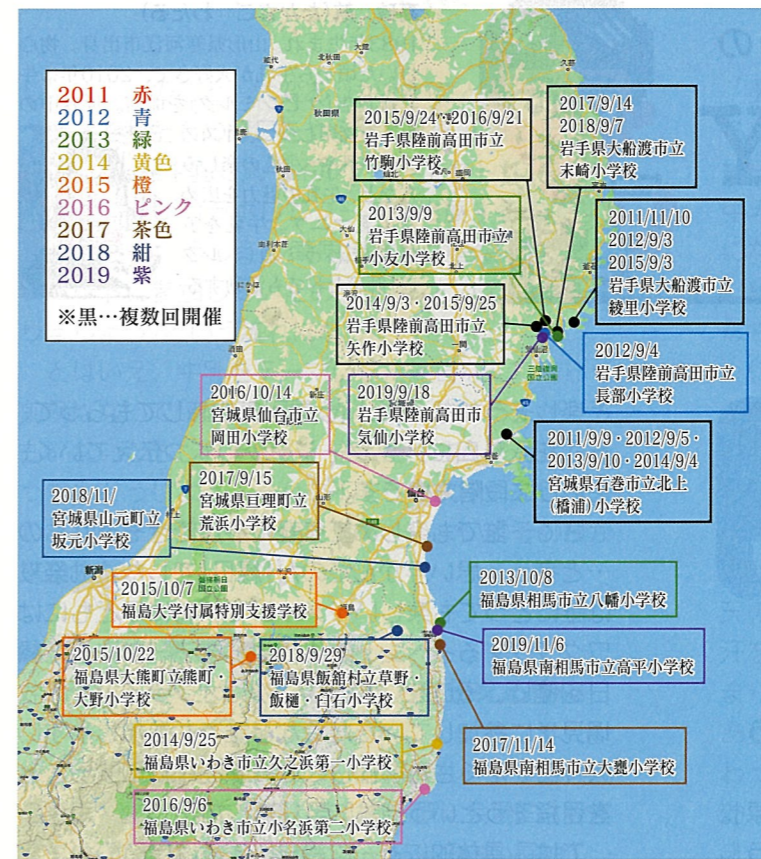
最初に実施する学校は、津波で多くの子どもたちや教職員が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校を希望しましたが、開催は難しいということで、同じ石巻市内にある北上川河口近くの橋浦小学校に決まりました。橋浦小学校は当時、全壊した同市の吉浜小学校や相川小学校が校舎を間借りしており、一つの校舎に3つの小学校が存在する中、児童たちがそれぞれ学校生活を送っていました。開催に向け事前打ち合わせに伺った時、「子どもたちに笑顔になってほしい」とおっしゃっていた校長先生の言葉が忘れられず、そのことをテーマに体験内容を検討しました。

開催日前日、全国から36人の酪農家が被災地のホテルに集合しました。体験準備隊はジャージーの親牛1頭、子牛3頭と共に橋浦小学校の体育館に宿泊し開催に備えました。ホルスタインの親牛1頭、子牛3頭は当日入りすることになりました。当日は、初めて行う被災地での



もーもースクールでジャージーと触れ合う子どもたち

図 「もーもースクール」開催学校(東北分)



酪農体験に、誰もが緊張と不安を抱えていましたが、実施する体験内容をチェックし、子どもたち全員に楽しく体験してもらうことを確認した上で、3校合わせて児童170人の酪農体験がスタートしました。校庭には保護者もたくさん訪れ、子どもたちを見守っていました。

子どもたちは小人数のグループに分け、一つのグループに3人の酪農家を配置。低学年は小柄なジャージー、高学年はホルスタインから始まるように子どもたちに配慮した形を考えました。子牛のシャンプーやブラッシングは、緊張している子どもたちの気持ちを和らげ、不安を少なくするために考えました。子牛の散歩は少しでも安心した子どもたちが一緒に歩いたり、走ったりすることで子牛に寄り添うことができるようにと、スタッフが考えたことでした。シャンプーをしながら津波の日の怖さを酪農家に話し掛ける子どもがいたり、子牛と走り出すグループがいたり、酪農家の周りにはいつの間にか子どもたちが集まり、交流が始まりました。乳搾りでは怖がっていた低学年の子どもが自分の手で牛乳を搾り「やったー」と言って笑顔になったり、牛の背中に寄りかかり「気持ちいい」と言ったりする光景が広がりました。

酪農家が子どもを持ち上げ、牛の背中に乗せると、ひととき大きな歓声が上がり、「僕も」「私も」と大変なことになりました。そして気が付くと、校庭いっぱいに子どもたちや酪農家の皆さんの笑顔が広がっており、参加した全員が感動している瞬間を見ることができました。「やって良かった。これまで見たことのない子どもたちの笑顔を見ることができた」と言って涙ぐんでいた校長先生の姿が印象的でした。

### 感動体験を共有し寄り添うことで 少しずつ心開く子どもたち

体育館で行われたバターづくりでは、子どもたちが館内いっぱいに歓声を上げ、容器を振ることに夢中になっていました。お昼には、保護者や酪農家の女性の皆さんが用意した具たくさん牛乳鍋が振る舞われ、品数が多い学校給食も満足なボリュームになりました。会員牧場からアイスクリームも届けられました。

参加したスタッフも全員各教室で子どもたちと一緒に給食を食べました。その時は自分から話し出す子どもが多く、「私の家流されちゃった」「床上まで水来たの」「仮設から通ってる」など家のことや、「友だちが死んじゃった」「怖かった」と津波のことを話してくれました。子どもたちとそうした関係を築ける酪農体験の「力」を感じました。

帰り際には子どもたちとの別れを惜しむ姿があちこちで見られました。「カイト君」という児童は「帰らないで!」と泣きじゃくり、若いスタッフにしがみついています。牛をトラックに積んでいる時、若い先生は「帰らない

でほしいな…」と遠慮がちに言っていました。同僚の先生や家族が犠牲になったり、仮設住宅から通うなど先生も悲惨な状況にあることを実感した瞬間でした。

酪農体験には子どもたちの「内なる力(エンパワーメント)」を呼び起こす力があるようです。津波で受けた悲惨な光景や心の傷は想像を超え、つらい記憶は心の奥底にしまい込んでしまいます。しかし今回は感動する体験を共有し、子どもたちに寄り添うことで、少しずつ心を開く光景を見ることができました。

体験が終わった時の「来年また来るね」はスタッフ全員の共通した気持ちでした。この後9年間、被災地でのもーもースクールは続きました。東北と、熊本地震被災地の熊本を合わせて実施した学校は延べ30校に上り、延べ2,872人の児童・生徒に体験を届けることができました。東北ブロックでは今年も、高校生のジュニアファミリーーターと共にもーもースクールを継続しています。

#### 【牧場概要】

牧場名 ABITANIa ジャージーファーム  
 代表者名 安原 栄蔵  
 所在地 青森県西津軽郡鯉ヶ沢町大字建石町字大曲225-2  
 総飼養頭数 約60頭(うち搾乳牛27)  
 年間生産乳量 約190t  
 飼養形態 放し飼い(フリーストール)  
 自給飼料面積 約3ha  
 牧場スタッフ 3人(本人、妻、長男)  
 交牧連加入年 2009年  
 主な活動 酪農教育ファーム受け入れ(6件/年)、イベントへの出前授業(4回/年)